



うた：峰 万里恵 ギター：三村 秀次郎 ギター：高場 将美

I

1. わたしの不幸の夜 *La noche de mi mal*

作詞作曲：ホセ・アルフレード・ヒメーネス *José Alfredo Jiménez*

カンシオン・ランチェーラという、メキシコの地方色をもった歌謡ジャンルの曲です。——作者（自分でも歌った）はメキシコらしいマチョ（男）的な心で、でも深い愛情にあふれて、独自の詩的な表現をもったたくさんの曲をつくりました。ほとんどの曲が、実際の体験から生まれています。

「わたしは、あなたの名前をふたたび聞きたくない。あなたがどこへ行くのか知りたくもない」と、あの夜あなたは言った。あの、わたしの不幸の黒い夜。

もしわたしが「行かないで」と言っていたら、どんな悲しい運命が、わたしを待っていたろう。もしわたしが「わたしを置いていかないで」と言ったら、わたし自身の心が笑い出しただろう。

だから、あなたの目に映るわたしは、あんなに落ち着いていた。わたしは冷静に歩いていった、青よりも青い空の下を。

その後はこの通り。わたしは、できるところまでがまんした。そして最後には、海のように泣いた、あなたに見られないところで。

2. ラ・ジョローナ（泣き女） *La llorona*

メキシコ、オアハーカ州伝承曲 *Folklore oaxaqueño*

ことをやめない。

あなたが教会から出てくるのを、ジョローナ、わたしは通りすがりに目にした。美しいウィピール（先住民のブラウス）をまとった姿に、わたしはあなたを処女マリア様だと思ってしまった。

ああ、あわれなわたし、ゆりの野のジョローナよ、恋のことを知らないものは、命を捧げる殉教のこともわからない。

わたしが愛しているのに、ジョローナ、あなたはもつと愛することを求める。もうあなたに命をあげてしまったのに、これ以上、何がほしいのか？

ああ、あわれなわたし、ジョローナよ、わたしを川のほとりへ連れて行っておくれ。わたしをあなたのショールで包んでおくれ、わたしは寒さで死にそうだから。

3. フィーナ・エスタンパ（優雅な姿） *Fina estampa*

作詞作曲：チャブーカ・グランダ *Chabuca Granda*

ペルーの首都リマを代表する歌はワルツです。ワルツはヨーロッパの舞曲なのに変ですが、19世紀末～20世紀初めに、リマのアフリカ系の住民が多い地区で、民謡などを、ギターで即興の変化に富んだワルツ風のリズムで演奏することが始まりました。やがて、いわゆるジャズっぽい和音も付けられるようになり、1920年代から

は歌詞もちゃんとつくられてポピュラー・ソングの形が定着しました。

この曲は、リマのワルツに、さらに高い芸術性と、ペルー文化に深く根ざした性格を与えた女性チャブーカ・グランダの作品です。愛する人——亡くなった彼女のお父さん——の優雅な姿を想ってつくられました。

楽しい歩道、太陽か月の光を浴びて、ベルトのように伸びてゆく——両側には朝焼けと夕焼け。ゼラニウムの朝焼けと、恥じらいをもったほほえみ。カーネーションの夕焼けと、花ひらく両ほほ。

マグノリアに薫り、夜明けの露をやどして、歩道はほほえむ、あなたの両足の愛撫を受けて。窓辺の鳥かごでククリー鳩が笑い、窓は身をふるわせる、あなたの優雅な姿が歩道をそぞろ歩くとき。

歩道はあなたを、あちこちの玄関へ運んでゆく、魔法の中庭に向かう、小さな広場へ向かう、夢に見た愛のど

ころへ。歩道の子守唄は、タフタのドレスのきぬずれの音、絹のブーツのヒールのひびき、糊のきいたペチコート

の音。
その楽しい歩道を、わたしも歌って歩きまわろう、あなたを捕まえられるかもしれないから。優雅な姿の紳士、あなたが来るまで待ってられる人なんていない。

優雅な姿の紳士、明星が帽子の下でほほえんだとしても、あなたのように美しく、輝くほほえみはできない。あなたの歩みは、どんどん進んでゆく歩道を輝かせる。

4. 亜麻の花 *Flor de lino*

作詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito* 作曲：エクトル・エスタンポーニ *Héctor Stamponi*

この詩人と作曲者（ピアニスト）は、1940年代の若返ったタンゴの代表者たちです。この曲はワルツですが、和音にはジャズの影響があると同時に、民俗音楽の気分もいっぱいです。歌詞は、「夜」というものが花の名前のように使われる現代詩。「亜麻の花」というのも単なるイメージで、詩人も、亜麻にどんな花が咲くのか知らなかったそうです。まず詩が書かれ、それに密着して作曲されました。

彼女は「夜」の花びらを、恋占いでむしっていた、キスをくれる人をむなしく待ちながら。わたしは、春の大地の大きなキスを夢見ていた……。亜麻の花、なんという不思議な運命が、花咲く亜麻の道を断ち切ってしまう

たことか！

彼女は「夜」の花びらを、むしっていた、わたしがいま彼女を待っているのと同じように待ちながら。彼女は恥ずかしさでいっぱいだった、新しい服を着せられた男の子のように……。不在の花、あなたの思い出は、いつでもわたしを追いかけてくる。わたしの孤独の、いつでも夜のなかを。

わたしは彼女が、亜麻のように花咲くのを見た、太陽で熱したアルゼンチンの大地の亜麻のように。もしわたしが彼女のことを理解できていたなら、わたしの小屋にはもう愛があったのに！でもある日、悪魔の仕業！わたちの跡が彼女を連れ去った。そしてきょう、野は花ざかり……。呪われたわたしには彼女の愛がない！

5. モウラリアは夜 *É noite na Mouraria*

作詞：ジョゼ・M・ロドリゲス *José Maria Rodrigues* 作曲：アントーニオ・メシュトル *António Mestre*

ポルトガルのファド。——モウラリアは、かつてリスボンに住み着いていたモウロ人（北アフリカから来たアラブ文化の人々）が住んでいた地区。19世紀には、ここは多く船乗りの集まる夜の歓楽街となり、最初にファドがうたわれた地区のひとつとなりました。初めてファドをうたったのは売春婦たちとならず者たちでした。

このファドの作曲家はアコーディオン奏者で、1970年ごろからブラジルのリオに渡り、コパカバーナ海岸に、ファドとポルトガル料理の店を持っていました。

ギターがひとつ、小さな声で、うすぐらい小路で古い昔のファドを口ずさむ。モウラリアは夜。

タイジュ川で船がひとつ、汽笛を鳴らす。通りを過ぎてゆくやくざもの。それぞれの口にキスがひとつ。モウラリアは夜。

月光が路地に落ちる。風に乗って失われた郷愁。空に星がひとつ燃え尽きる。小路には哀歌ひとつ。

愛の嘆きの歌、それはファド。想いにノスタルジーをはこんでくる。時は急いで通り過ぎてゆく。モウラリアは夜。

すべてはファド、すべては人生。すべては宿のない愛。痛み、感情、よろこび。すべてはファド、すべては運命。人生と死のモザイク。モウラリアは夜。

6. 黒い舟（暗いはしけ） *Barco negro*

作詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ *David Mourão-Ferreira*
作曲：カコ・ヴェリヨ & ピラチーニ *Caco Velho & Piratini*

ファドに分類されてはいますが、ブラジルの曲にポルトガルの詩人・小説家がべつの歌詞をつけたものです。原作は、白い農場主の子どもを育てるアフリカ人老女をうたった『黒い母』で、内容はまったく関係ありません。

ポルトガルに舞台が移ったこの曲は、1955年のフランス映画『過去を持つ愛情』の1シーンで、アマリア・ロドリゲスさんがうたったことで、世界中に知られ、ファドの代表曲となってしまいました。

朝、こわかった……砂浜に横たわり、あなたに顔がみ
にくいと思われるのが不安で、わたしは震えながら目を
覚ました。でも、あなたの目はすぐに、そんなことはない
と言った。そして太陽の光が、わたしの心に刺しこん
だ。

その後、わたしは見た。岩の上に、十字架。そしてあ
なたの船は、光の中で踊っていた。

わたしは見た、あなたの両手。嵐に船を吹き飛ばさ
れないように、もう切り離されてしまった帆のあいだで、
わたしになにかを告げようと振られていた……。

浜の老女たちは言う。あんたはもう帰ってこないよ。
嘘だ！ 彼女たちは頭がおかしいんだ。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発

もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべて
が、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしとい
っしょにいます。

ガラス窓に砂を打ちつける風のなかに——うたってい
る水の流れのなかに——消えかけている火のなかに——
ベッドのぬくもりのなかに——だれもない腰掛けのな
かに——わたしの胸のうちに——あなたはいつも、わた
しといっしょにいます。

わたしは知っている、愛するひと、あなたはまだ出発
もしなかったことを。だって、わたしのまわりのすべて
が、わたしに言っている。あなたはいつも、わたしとい
っしょにいます。

II

1. 腕を出して、こっちへ来て *Dá-me o braço, anda daí*

作詞：リニャールシュ・バルボーザ *João Linhares Barbosa* 作曲：ジョゼー・ブランク *José Blanc*

作詞者はファド最高の詩人と讃えられた人です。1920
年代から、歌い手に歌詞を売ることによって生計を立てていま
した。長いあいだファド・ファンのための雑誌の編集長
でもありました。伝統的なファドでは、まず歌詞が選ば
れ、そのあとで、それにふさわしい既成のメロディを探
します。この歌詞を買ったアマーリアさんは、昔のポル
トガル・ギター奏者のつくったメロディを選びました。

わたしに腕をちょうだい、そこから出ていらっしやい。
わたしはあなたに寄りかかってうたいたい。月光が落ち
てくるのを感じながら、夜が終わるまで寄りか

かってうたいたい。

この真っ赤なバラが、わたしを、おいしそうに見
せるでしょう？わたしたちは、浮かれて遊ぶ人生の3
人——あなたと、わたしと、このバラと。

わたしは並んで通って行ってやる、それが楽しみ、
あの女に並んでやる。ファドを歌わないあの女、あな
たがわたしを裏切った、そのときのあの女。

それからみんなで郊外へ遊びに行く。わたしはこの
浮かれ遊ぶ人生が大好き。夜更けに、扉のそばであな
たにキスする。そして扉を閉めて、あなたを愛す。

2. このおかしい人生 *Estranha form de vida*

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*

作曲：アルフレード・マルスナイロ *Alfredo Marceneiro*

この歌詞は、うたうアマーリアさん自身が書きました。
メロディは、大先輩のマルスナイロがつくった《ファド
・バイラード》と呼ばれるものを使いました（細部はか
なり直していますが）。マルスナイロは、ファドをうた
う男性の、時代を超えた最高峰で、アマーリアさん同様
に、まったく他の追従を許さない「唯一の」アーティスト
です。ことばを宝物のように大事にして、詩の心の美
しさ、豊かさを伝えていました。

神様の意思だった——わたしが、このように思いま
どいながら生きているのは。そして、すべての「アイ！」
はわたしのもの、わたしのサウダードも。——神様の意
思だった。

なんという変わった生きかたを、このわたしの心はも

っているのだろう。なくしてしまった命で生きている、
だれか運命を変える魔法の杖をあげればいいのに——な
んという変わった生きかた！

ひとり立ちしている心、わたしの命令をきかない心。
おまえは人々のなかで道をなくして生きている、かたく
なに、血を流しながら——ひとり立ちしている心。

わたしはこれ以上おまえについていけない。生まれ、
鼓動をやめなさい。どこへ行くのか知らないくせに、な
ぜ走りつづけることに、こだわるのだ？——わたしはも
う、おまえといっしょには行かない。

*「サウダード」は、いまそこにはないもの、過ぎ去ったもの、持ってい
ないものへの、愛情と悲しみのミックスした感情。

3. イパカライの思い出 *Recuerdo de Ypacarai*

作詞：スレーマ・デ・ミルキン *Zulema de Mirkin* 作曲：デメトリオ・オルティース *Demetrio Ortiz*

作曲者はパラグアイ人の歌手・朗読家でギタリスト、政治的理由で母国を離れ、アルゼンチンで一生を終えました。この曲は、故郷のイパカライ湖のほとりでの実体験をもとに作曲。パラグアイ先住民のことばグワラニ語で歌詞をつけました。後年、アルゼンチンの女性詩人によるスペイン語歌詞で、広く知られるようになりました。

ある暖かい夜、わたしたちは知り合った、イパカライの青い湖のほとりで。あなたは悲しげに、道すがら

うたっていた、グワラニ語で、古いメロディの数々を。そして、あなたの歌の魔力とともに、わたしの中にあなたへの愛が生まれていった。満月の美しい夜の中、あなたの白い両手から、わたしに伝わった熱と愛情。

どこにいる？ むすめよ。あなたの柔らかい歌声はわたしのところにとどかない。すべてがあなたを思い出させる、イパカライの青い湖のほとり。わたしの愛はあなたを待っている、むすめよ。

4. シナモンの花 *La Flor de la Canela*

作詞作曲：チャブーカ・グランダ *Chabuca Granda*

きょう2つめのペルーのワルツ、これもチャブーカさんの作品です。タイトルは、実在した、あるアフリカ系ペルー女性の通称で、シナモンのような肌の色と、薫り立つ魅力を讃えたものでしょう。リマの街の名物女性のひとりでした。

わたしに語らせてください、思い出がまだ香りを失っていない今。今まだ夢の中で揺れている、古い橋と川と並木道が……。

髪にはジャスミン、顔にはバラの花。堂々とあでやかに歩んできた《シナモンの花》。いたずらっぽさをふりまき、歩いていったあとに残していった、胸に飾った香草の束の薫りを。

橋から並木道へ、かわいい足が彼女を運んでゆく。通ってゆく歩道は、彼女の腰のリズムでふるえる。彼女は川のそよ風の笑い声をひろって、風に投げかけていた、橋から並木道へ。

5. 灰色の雲 *Nube gris*

作詞作曲：エドゥアルド・マルケス・タジェード *Eduardo Márquez Talledo* 日本語歌詞：マリキータ帆足

3つめのペルーのワルツ。日本ではあまり知られていませんが、ラテンアメリカ・スペインなどでは超有名曲のひとつ。ペルー作詞作曲家協会の創立者である作者は、音楽のほか、家具など木工も天職としていました。晩年はギター教授のほか、各種の弦楽器を製作していたそうです。

わたしがあなたから去っていくのは、わたしがあなたの道を曇らせる灰色の雲だとさどったから。わたしから遠くで、あなたは幸せになってください。

そしてふたたび、わたしはさすらいの吟遊詩人に戻ろう。愛を探し求めて、ひとりの女性の愛を探し求めて……夢が輝いていた空はふたたび曇った。わたしは、また光のない世界に生きる。

6. ラ・ブルーハ（魔女） *La Bruja*

メキシコ、ベラクルース州伝承曲 *Folklore veracruzano*

ベラクルース州は、カリブ海・大西洋に面し、メキシコのなかでもきわだって熱帯の解放感にあふれた土地です。どことなくアフリカの色もあります。この曲は、民話が元だそうです。

アイ！ 朝の2時に、飛ぶのはなんとすてき！ 飛んでそのまま落ちてゆく、とあるご婦人の両腕のなかに。泣きたくなるよ、アイ、ママ！

魔女がわたしをつかまえて、家に連れてゆき、わたしを植木鉢とヒョウタンに変えてしまう。わたしをお

部屋に連れてゆき、彼女の両脚の上にすわらせ、キスを食べさせてくれる。

アイ！ 塩辛い海の真ん中で、わたしはびっくり、恐ろしかった！ 話には聞いていたけど信じていなかった。上のほうは女性、下のほうは魚、アイ、ママ！ 「アイ、教えてくださいませ。あなたはゆうべ、何人の赤ん坊を吸い取ってしまったんですか？」

「ひとりも吸い取っていませんよ、覚えていないけれど。わたしの狙いは、あなたを吸ってしまうこと」



1. ホセ・アントーニオ *José Antonio*

作詞作曲：チャブーカ・グランダ *Chabuca Granda*

ペルーのワルツです。——ホセ・アントニオは、作者が少女のころに会った素晴らしい老人でした。職業は、ペルーでは「チャラン」と呼び、日本語では「調馬師」というらしいです。競馬の調教とちがい、走るのではなく美しく歩むことを教え、乗馬用の馬を育てるのです。彼は純粋なペルーの品種の養育から始めて、失われていた伝統のステップを復活させた人です。アマンカエスは、アマリスの仲間の、黄色い花をたくさん咲かせる野草。花ざかりの6月ごろは、ペルーでは冬で、海岸地方は毎日黒い雲が低く垂れこめ、そこから霧雨が降ってきます。

小道づたいに、ホセ・アントニオが馬でやってくる。冬の霧雨の中を、薫るアマンカエスを見に行くのだ。

つば広のパナマ帽と首に巻いたスカーフ、斜め織りのポンチョを着た、いつでも同じ姿。彼はアラブの馬に、ペルーならでの、猫のようなすり足の歩みを教えた。

手綱は赤と白の二色の絹。そんなテープだけで、なんと優雅に馬をあやつってゆくこと！ アラブ馬は、もう砂漠と戦って前足を上げることはない。やわらかいペルーの大地を、優美なリズムでお尻を振りながら歩んでゆく。

ホセ・アントニオ！ なぜあなたはわたしをここに残して行ってしまったのか！ またあなたに会えるなら、それは6月がいい、霧雨が降っていてほしい。わたしはあなたの背中にしがみついて、あなたの麻のポンチョの下に入ろう。あなたの帽子のリボンには、わたしが取ってきたアマンカエスの花。

2. ジューリア・フロリーシュタ (花売りのジューリア) *Júlia Florista*

作詞：レオネーウ・ヴィラール *João Linhares Barbosa*

作曲：ジョアキーン・ピメンテーウ *Joaquim Pimentel*

ポルトガルのファド——ジューリア・フロリーシュタ (花売り女ジューリア) という芸名の歌手は、20世紀はじめの最高のファド・アーティストのひとりでした。酒場や料亭でうたうほかに、貴族の宴会やパーティにも呼ばれましたが、一生、花売りはやめませんでした (1925年没)。ギターラ (ポルトガル・ギター) をかき鳴らしながら、メランコリックにうたったそうです。うたっていないときは、うるさい男どものことばに見事な返事で切り返す、挑発的な女性だったとのこと。

ジューリア・フロリーシュタは、ボヘミアンでファ

ディーシュタだったと伝説は語る。ギターラのひびきに乗ってファドを生きた。花を売っていた。でもその愛は、決して売らなかった。

足にはサンダル、乱暴な歩きぶり、ジューリアが通ると、彼女の歌を聴こうとリスボンが足を止めた。空気の中に売り声、口には愛を語る歌。胸には花かごの、みごとに飾られた粋な姿。

おお、ジューリア・フロリーシュタ。わたしたちの記憶に、時が刻んだ、おまえの美しい物語。

おお、ジューリア・フロリーシュタ。おまえの声はこだまする、わたしたちのリスボンの、ボヘミアンでファディーシュタの、街々の夜ごとに。

3. スール (南) *Sur*

作詞：オメーロ・マンシ *Homero Manzi* 作曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

アルゼンチン・タンゴ——1948年にできた曲ですが、今日では歌のタンゴの最高峰のひとつと評価されています。詩人マンシが学生時代をすごしたブエノスアイレス南部の町はずれの風景に、バンドネオン奏者・楽団リーダーのトロイロが作曲。

古いサンフワンとボエード通りの角、一面の空。ポンページャ地区——その向こうは洪水を起こす川。思い出のなかの、若い恋人のきみの長い髪。そしてきみの名前が「さようなら」の上に浮かんでいる。あの鍛冶屋のあった街角、泥と草原。きみの家、きみの歩道、そして掘割。そして雑草とアルファルファのまじった香りが、ふたたび、わたしの心を満たす。

古いサンフワンとボエード通りの角、どこかへ消え

てしまった空。ポンページャ地区——土手に着くと、そこでふるえていた、きみの20才、あのときわたしが盗んだキスの下で。——過ぎて行ってしまったことどものノスタルジー。人生がいっしょに持っていった砂。変わってしまった街たちの嘆き、そして死んだ夢のながさ。

スール……土の堀、その後は……とある酒屋の明かりひとつ。もうきみは、むかしのように窓に寄りかかってきみを待っているわたしを見ることはないだろう。もうわたしは、静かに語り合うふたりの歩みを、星たちで照らすことはないだろう。場末の道たちと月たち、そしてわたしの愛ときみの窓。すべては死んでしまった、もうわたしにはわかっている……。

4. ラ・クンパルシート *La cumparsita*

作詞：パスクワール・コントゥールシ *Pascual Contursi*
作曲：マトス・ロドリゲス *Gerardo H. Matos Rodríguez*

1916年ごろ、ウルグアイの首都モンテビデオの高級キャバレー経営者の息子で、大学生だった作曲者が、カーニバルのパレードのテーマ曲としてつくりました。

1924年に、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで、大衆演劇の挿入歌として、脚本家のひとりだったコントゥールシが、最初の部分に新しいメロディを付け（原作そのままでは歌いにくいので）、全曲に作詞しました。

あなたにわかってもらえるだろうか！ まだ、わたし

は魂の中に、あなたへの愛情をもちつづけていることが。

友達もたずねてこない。見捨てられた小部屋には、もう朝の太陽も、窓から顔をのぞかせてくれない。あの仲間だった子犬も、あなたがいなくてもものも食べなくなり、やっぱり、わたしを見捨てていった。

あなたにわかってもらえるだろうか！ わたしが決してあなたを忘れなかったことを。過去をふりかえれば、きっとあなたも、わたしのことを思い出すにちがいない。

5. ラグリマ (涙) *Lágrima*

作詞：アマーリア・ロドリゲス *Amália Rodrigues*
作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ *Carlos Gonçalves*

全曲アマーリア・ロドリゲスさんが書いた歌詞による2枚めのアルバム（1983年）のタイトル曲でした。そのずっと以前から、病のなかで、発表などする気はなく、少しずつ断片的に書いていた詩です。こんな詩をうたうことが、アマーリアさんの生きる気力、健康の回復につながりました。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望——わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わた

しは刑罰を受けている。あなたがきらい——わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら——死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙——あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

ごいっしょに時間をすごしていただきありがとうございました。
今後ともよろしく願いいたします。

選曲・構成：峰 万里恵
プログラム作成：高場 将美

これからのスケジュール

12月5日(土) 19:00~ (開店18時)

スペイン・バル **Olé** (オレ)

新宿区高田馬場 3-12-27-105
TEL & FAX: 03-3364-3466

チャージ1500円+通常のご飲食料金

*フアド、各国のクリスマスの歌など多彩な曲目

12月25日(金) 19:00(開場18時30分)

N.N. Estudio Ebisu

渋谷区恵比寿 1-21-6 N. N. ビル1F

チャージ1800円(ワンドリンク付き)

*フアルゼンチン・タンゴ中心のプログラムです。

➡ ご予約はお店に直接、または峰 万里恵まで—— tel: 03-3479-2420 fax: 03-3235-0470
E-mail: marie-mine@hotmail.co.jpOlé